博士論文要旨

BPD傾向者における見捨てられスキーマとBPDの徴候との関連

The Relationships between the Abandonment Schemas and Borderline Personality Characteristics in Individuals with Borderline Personality Features

井合　真海子（Mamiko Igo）　　指導：根建　金男

第１章　境界性パーソナリティ障害およびBPD傾向者の特徴

本章では，BPDの病理の特徴や，BPDの理論の変遷，BPDに特徴的であるとされる見捨てられ不安の高さ，BPD傾向者の特徴について，先行研究を概観した。第１節では，BPDの病理の特徴について「感情統制不全」，「行動統制不全」，「関係性の混乱」に大別して述べた。第２節では，主に臨床的見地より，BPDの病理において重要視されてきた見捨てられ不安に関して概観した。第３節では，BPD臨床群よりも重篤ではないものの，BPDの病理の特徴をもつBPD傾向者について先行研究をまとめた。そして，BPD傾向者は多領域において機能不全を有しており（Trull et al., 1997），病理の悪化防止という予防的観点からも，BPD傾向者に関する研究は重要であることを述べた。

第２章　認知行動理論における見捨てられスキーマ

本章では，認知行動理論の立場から，BPDの病理の理解とアプローチ方法，見捨てられスキーマの重要性について，先行研究を概観した。第１節では，近年のBPD研究における認知行動理論的視点について，パーソナリティ障害に対する認知療法やスキーマ療法の理論をふまえて述べた。第２節では，BPDの主要なスキーマとされている見捨てられスキーマについて先行研究をまとめた。ここで，見捨てられスキーマとは，見捨てられることに関する認知的枠組みであり，BPDの特徴を持つ者は，そうでない者と比べて見捨てられスキーマを強く有していることが示されているものである（Nordahl et al., 2005）。そこで，本論文は，見捨てられスキーマに注目して研究を行うこととした。

第３章　BPD傾向者と見捨てられスキーマに関する先行研究の問題点

本章では，第２章で取り上げた見捨てられスキーマに関する研究の問題点を挙げた。具体的には，見捨てられスキーマを詳細に測定する信頼性・妥当性の高い尺度が必要であること，見捨てられスキーマがBPDの徴候に及ぼす影響に関するメカニズムを検討した実証研究が少ないこと，BPD傾向者を対象として，見捨てられスキーマに焦点を当てて介入を行った研究は見受けられないことを指摘した。

第４章　本論文の目的・意義・構成

本章では，第３章で指摘した問題点を踏まえて，本論文の目的と意義を論じた。具体的には，見捨てられスキーマを測定する尺度の開発，見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの検討，見捨てられスキーマの変容がBPDの徴候の改善に与える影響を検討する介入研究を行い，見捨てられスキーマを介入の焦点とすることの有用性を検証することを本論文の目的とした。なお，本論文中の研究の母集団は，医療を要するほどではないがBPDの徴候を有し，BPDに移行するリスクがあり得る，BPD傾向者で，どの研究の（主な）対象者も，BPD傾向（青年期以降に発現しやすい）を有する大学生であった。

第５章　見捨てられスキーマ尺度（the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ）の開発

本章では，捨てられスキーマ尺度（the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ）を開発し，信頼性・妥当性を検討した。研究１－１では，因子分析の結果，「恒常的な見捨てられ･孤独」因子，「親密な関係に対するしがみつき・同一視」因子，「他者からの好意に対するあきらめ」因子の３因子構造が得られ，高い内的整合性が示された（α＝.89）。研究１－２では，調査研究を行い，ABSQは日本語版PDQ-R（上原ら，1996）のBPD項目 および愛着スタイル尺度の見捨てられ不安項目（中尾・加藤，2004）と有意な相関係数を示した。これらの結果から，ABSQの十分な信頼性および併存的妥当性が確認された。また，研究１－３では，見捨てられ不安項目とBPDのためのスキーマ同定質問紙（井沢，2005）との弁別的妥当性を検討したところ，ABSQはBPD傾向者の見捨てられスキーマを測定することに特化した尺度であり，上述の２つの尺度との弁別は可能であることが確認された。

第６章　質問紙調査による見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの検討

本章では，ABSQを用いて，見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響のメカニズムに関して，質問紙調査による検討を行った。研究２では，見捨てられスキーマがBPDの徴候である感情の不安定性（the Affective Lability

Scale: ALS；加藤，2005）や行動化（SCID-ⅡのBPDの行動化に関する７項目）に対してどのような影響を与えているかについて検討した。パス解析の結果，見捨てられスキーマが直接的に，あるいは感情の不安定性を介して，行動化に影響を及ぼしているという因果モデルが示された（Figure 1）。

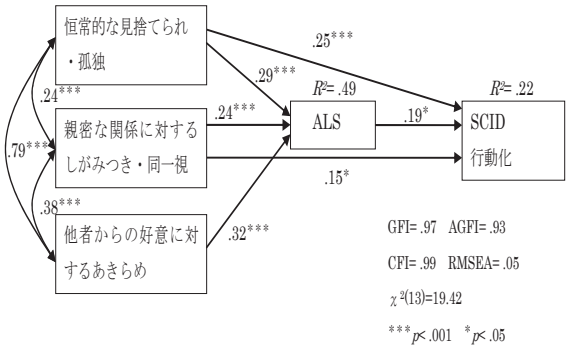

Figure 1

研究３では，見捨てられスキーマが誘発している対処方略がBPDの徴候に及ぼす影響について検討した。パス解析の結果，見捨てられ場面において，見捨てられスキーマが「放棄･あきらめ」，「肯定的解釈の不足」といった認知的対処と「効果的なコミュニケーションの不足」といった対人的対処を誘発して，それらの対処がBPDの徴候に影響を及ぼしているという因果モデルが示された。

第７章　見捨てられ場面における見捨てられスキーマとBPDの徴候との関連

本章では，見捨てられ場面をイメージ想起する実験を行い，見捨てられ場面における見捨てられスキーマの賦活の程度と，認知（自動思考）・感情・行動について，BPD傾向高群とBPD傾向低群の反応の違いを比較した（研究４）。その結果，BPD傾向高群はBPD傾向低群に比べて見捨てられスキーマに関連する発話が多く，BPDの徴候に関連するような自動思考・感情・行動が誘発されやすいことが示された。さらに，見捨てられ場面の相手の親密度の高低で，賦活しやすい見捨てられスキーマの因子が異なり，その後の自動思考・感情・行動が違うという結果が得られた。

第８章　見捨てられスキーマの変容がBPDの徴候の改善に及ぼす影響

本章では，研究１～４の結果をふまえて，ABSQを用いて，見捨てられスキーマの変容に焦点を当てた介入研究を行った。研究５では，BPD傾向者を対象として，見捨てられスキーマの内容を反証する認知的再構成の手続きの有用性について検討する２週間の短期的介入実験を行った。その結果，交互作用が示され，見捨てられスキーマ焦点群は，実験期間は何も介入を行わないWaiting List群と比較して，ABSQの第１・３因子得点の低減が有意および有意傾向であった（$F(1, 13)=3.61$，$p<.10$；$F(1, 13)=6.94$，$p<.05$）。一方，見捨てられスキーマの内容の反証の手続きのみを用いる短期的介入では，BPDの徴候の改善までは至らなかった（$F(1, 13)=.01$，*n.s.*）。

研究６では，研究１～５の結果をふまえて，研究５の見捨てられスキーマに対する反証手続きに加えて，研究３で得られた見捨てられスキーマが誘発する対処の変容を意図する手続きを行う８週間の長期的介入実験を行った。その結果，見捨てられスキーマに焦点を当てた群は，見捨てられスキーマに焦点を当てずに認知行動療法的な介入を行った群，およびWL群と比較して，ABSQの得点が有意に低減していた（$F(4, 42)=3.60$，$p<.05$）。また，BPDの徴候のひとつである行動化の得点の低減が有意傾向であった（$F(4, 41)=32.75$，$p<.10$）。その結果を，Figure 2に示す。よって，BPD傾向者において，見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を促すことが，BPDの徴候の中でも特に行動化の改善につながることが示された。

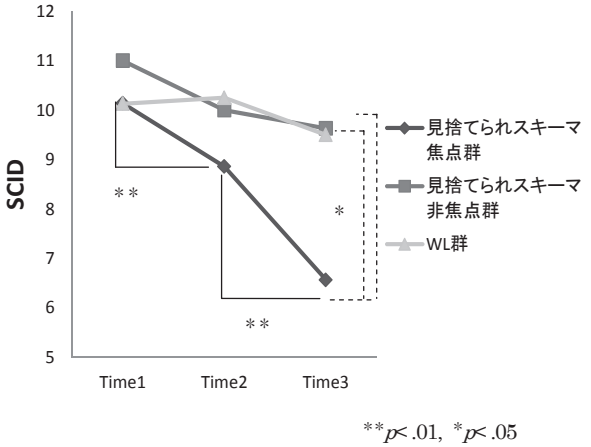

Figure 2

第９章　総括的考察

本章では，全ての研究に関する総括的考察を行った。本論文の研究１～６によって得られた成果，本論文の意義，本論文の限界と課題について考察した。本論文の研究１では，見捨てられスキーマを詳細に測定する信頼性・妥当性が高い尺度が開発された。これは，BPD傾向者を対象としたカウンセリング場面において，BPD傾向者の特徴を知るアセスメントツールとして有用であると考えられる。本論文の研究２～４においては，見捨てられスキーマがBPDの徴候に与える影響のメカニズムについて検討し，先行研究では示されなかった新たな知見が得られた。本論文の研究５・６では，BPD傾向者を対象として，見捨てられスキーマに焦点を当てた介入研究を行い，見捨てられスキーマに介入の焦点を当てることが，BPDの徴候の改善に有効である可能性が示唆された。